

2017年9月2日、3日の二日間、福岡国際会議場にて行われた日本自閉症スペクトラム学会第16回研究大会に参加しました。

参加者数は800名を超えました。基調講演Ⅰ、特別講演Ⅰ、特別教育講演Ⅰ、大会企画シンポジウムⅠに加え、自主シンポジウム10、口頭発表19、ポスター発表48の学会員による研究発表が行われ、活発な議論が展開されました。報告者は口頭発表①のグループにおいて「特定の職員に対して他害行為がある自閉症者A氏の行動改善～トークンシステムを併用したチームアプローチ～」と題して実践研究を発表しました。



本大会のメインテーマは「生涯発達から見た自閉症スペクトラム症の人々」であり、乳幼児期から成人までの様々なライフステージで支援にあたった先生方の講演を聞くことができました。

基調講演では児童精神科医である村田豊久先生の「生涯発達から見た自閉症」というテーマで話を聞くことができました。先生が関わってこられた乳幼児から老年期にわたる数々の当事者エピソードを通して、村田先生の自閉症の方々への深い愛情と尊敬の念が感じられました。先生が始められた自閉症児の療育グループ「土曜学級」の話では、ユニットケア、個別ケアの重要性とともに、ボランティアの積極的活用といったインフォーマルな資源の活用の大切さを理解することができました。

特別講演では、福岡市立心身障がい福祉センター長で小児科医である宮崎千明先生から「自閉症スペクトラムの早期診断と療育の抱える課題」についての話を聞くことができました。自閉症スペクトラムの子供たちへのかかわりを温かい語り口で話すことが印象的でした。療育センターにおける新規受診児は増加傾向にあり、専門医、療育支援者の人材育成の重要性が指摘されていました。また、自閉症児本人だけでなくその保護者の支援の大切さを学ぶことができました。今後は、幼児期の療育から学校へのつなぎ、放課後等デイサービスの質の担保などが課題であることが理解できました。

さらに特別教育講演では文部科学省の田中裕一氏の「発達障害に関する最新の動向～学習指導要領の改訂と合理的配慮を中心に～」というテーマで話がありました。学習指導要領の改訂では、総則に、障害の状態に応じた指導方法等の工夫を組織的かつ継続的に行うことが明記されました。講演では、生涯発達の視点に立って「引き継ぐことがとても大事です」と繰り返し強調がされていました。

大会企画シンポジウム「自閉スペクトラム症の人々と自然災害」では、「自然災害に備えなければならない現在、自閉スペクトラム症の人たちがそのような災害にあった時にどのように考え行動するのか、さらにどのように支援していくと良いか」という視点で活発な議論が行われました。「非日常生活は日常生活が支える」という言葉が印象的でした。シンポ

ジウムでは、防災訓練に限らずに、考えられる状態像や行動を盛り込んだ日々の活動や体験を日頃織り込んでいくことの重要性が表明されました。普段からのきめ細やかな支援が大切であると思った次第です。

口頭発表、ポスター発表では、各会場で熱心な討議が行われていました。TEACCH、応用行動分析学に基づく行動障害に対する支援の報告が多くありました。また、「CLISP-d d発達検査」、「TTAP」の評価手法を用いた、社会参加への準備、成人期の就労移行時の支援に関する発表も多数ありました。

支援のバトンを繋いでいくことの大切さを実感した学会二日間でした。様々な場所で活躍されている多職種の方々との交流は今後の利用者・保護者支援および自己研鑽にいい影響、刺激を与えてくれました。参加の機会をいただいたことに感謝いたします。